

こけしのひとりごと。

こけしは土湯の
こころです。

土湯温泉は遠刈田、鳴子と並ぶ三大こけし発祥地と言われています。こけし工人の手によって何の変哲もない一片の木の塊が削られ、磨かれ、描かれ、少しずつ生命を吹き込まれながら美しく優しい表情のこけしに生まれかわります。

優しく見つめてくれるような独特の表情と、素朴な木のぬくもりを持つ「土湯こけし」は今も昔も変わることなく多くの人の心を和ませてくれます。全国各地の「伝統工芸」と呼ばれ、伝えられているものの多くは、ほとんどがその土地の暮らしに根付いた生活の道具や子どもたちのための玩具として作られていました。土湯も例外ではなく、一年の三分の一を雪に閉ざされ、湯治客も現在とは比べものにならないほど少なかった時代、暮らしはもっぱら林業に頼るだけでした。辛い山仕事の合間コソツと、ある時は家族のために、ある時は豊かな生活を夢見て続けられてきました。人々はどんな気持ちで作り、伝えてきたのでしょうか。

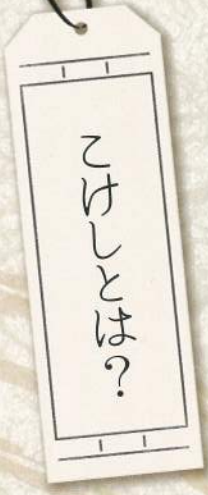
現代の工人たちの作る土湯こけしにも、そんな遠い昔からの『土湯の歴史と風土と人のこころ』が込められているに違いありません。それゆえにこそ、あの柔和で優しくあたたかい表情が生まれるのでしょう。こけしは土湯のこころのあらわれなのです。これからも伝統・伝承のこころでこけし作りは引き継がれていきます。

TSUCHIYU

土湯の名品

KOKESHI





こけしとは、江戸時代末期頃に東北地方の温泉地で発祥したといわれている轆轤（ろくろ）挽きの木の人形のこと。こけしは、鉢や盆などの木製の生活用具を作る「木地屋」と呼ばれる職人が作りはじめたと言われており、その頃の湯治客が女の子のままごと道具として土産に買い求め、東北各地に広まっていった。

こけしは、産地によって特徴があり、土湯系を含め、東北6県で大きく11系統に分かれている。呼び方も産地によって様々で、土湯では「でこ」・「でく（木偶）」などと呼ばれていた。各地でばらばらな呼び方を「こけし」と呼ぶことに統一されたのは、昭和15年のこと。

現在でも信じられている「子消し」という子どもを間引いたその霊をなくさめるために作られたという俗説には何の根拠もない。本当は「子宝に恵まれない」と望み、子どもを愛するゆえに生まれた愛玩具として現在まで作り続けられている。



こけしの顔、表情は工人によってさまざま。十人十色。こけしと工人の顔を見比べてみてください。本人の顔や家族の顔にどこか似ているといわれています。



こけしができるまで

1 こけしの原木は伐採してから皮をむき、一年近く寝かせて自然乾燥させる。

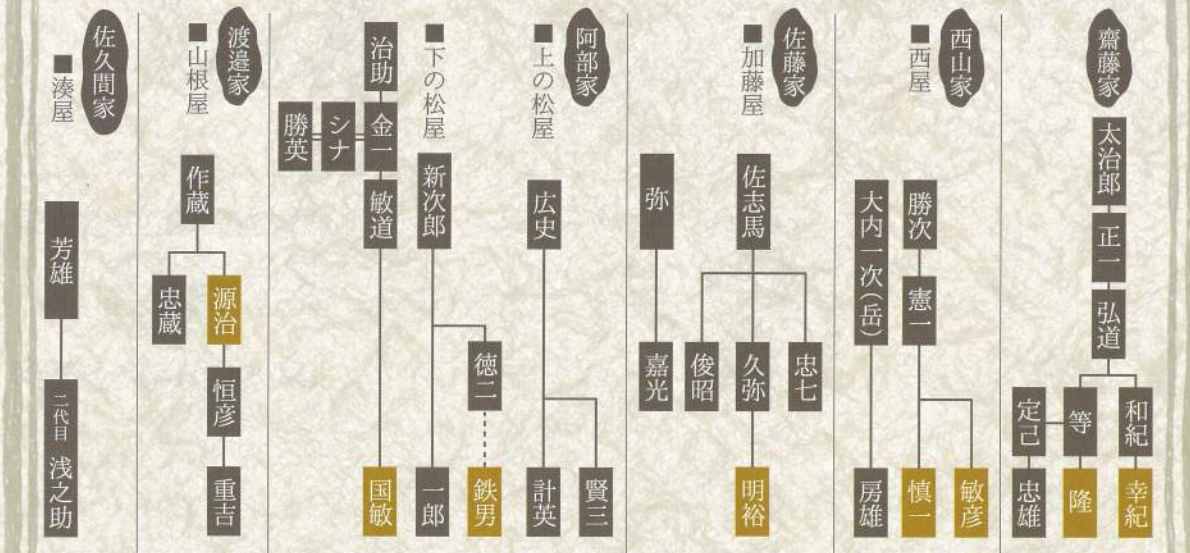
2 こけしの寸法に合わせて木を切断し、ろくろを回転させ、思い通りの形に削りあげていく。

3 きめ細かくするため、紙やすりやトクサで磨き上げた後、ろくろの回転を使い、胴体にろくろ模様を描く。

4 頭頂部に土湯系の特徴である、「蛇の目模様」を描き、前髪と鬢の間にカセと言われる髪飾り、クジラ目にたれ鼻、おちょぼ口を描く。

5 ろくろの回転で生じる熱を利用して頭部を胴にはめ込む。木と木がこすれ合って煙が立ち上がる。「はめ込み式」なので首を回すと「キィキィ」と愛らしく鳴く。

土湯こけし系統略図



こ

けし工人の源は鉢、盆などの木地製品を作る「木地屋」「木地挽き」と呼ばれる人々であったといわれている。こけしの歴史と木地屋の歴史は必ずしも一致しないが、土湯へは三百年ほど前に会津の高森村、達沢村あたりの木地集落から山を越えて伝わってきたと考えられている。

古文書にも「当村は、田方作物などもなく、温泉場であるゆえ、平日入浴人の宿をしていささかの木銭を取り、その他は男女山仕事に相励み、あるいは挽地、下駄、棒類の細工を持って生活している村柄である。」とあり、山間の土湯温泉にとって木地業は重要な産業であった。その後、近郷村落との交流が活発になるにつれ、地場産業としての力を持つようになった。

製品や、ブリキ、セトモノ、鉄などを素材にしたものにとって代わるようになり、土湯の木地業は湯治場といういわば保養、行楽の地としての性格ともあいまって、次第にその中心は日用雑器、子どもの玩具へと移っていった。

当時はこけしも、子どもたちが湯治のおみやげに親から買ってもらうおもちゃのひとつだった。

明

治の中期に土湯木地業にとって大きな変化が起こった。それまでろくろは、綱取りと鉋取りの二人で挽くものであったが明治十八年、伊沢為次郎という木地職人によって、当時関東地方で発達した一人挽きろくろの技術が伝えられた。

一人挽きろくろの普及は能率の向上だけでなく生産能力、そしてなにより製品の仕上げに違いをみせた。

再び土湯こけしが注目されるようになったのは、いわゆる「土湯ルネッサンス」と評価される齊藤太治郎や阿部治助、阿部金蔵たちによる新しいこけし作りへの動き。彼らの作品は、以前のものに比べると『まで』（方言でていねいという意味）な仕上げをほどこし、洗練されたこけしを目指した。こけしは子どもの玩具から大人の鑑賞品へと変化し、こけし収集家の注目を集め、昭和十年から十五年の第一次こけしブームの中核をなした。それはやがて昭和四十年から五十年代の第二次こけしブームへと続いていく。

土湯ルネッサンス

そして現在、第三次こけしブームとしてこけしが注目を集めている。第一次、二次ともにブームの中心は中高年の男性だったが、第三次こけしブームは若い女性を中心に広がりを見せている。こけし専門の雑誌やこけしモチーフの雑貨などの影響もあり、こけしは主に関東方面の若い女性に人気となっているようだ。こけしは手作り一点一点、価格も小さいものは千円程度ということも魅力のひとつになっているようだ。

明治になると土湯の木地師達は外部からの新技術や様々な刺激を受け、当然の結果として、作風にも大きな変化が生まれる。後年「土湯ルネッサンス」と呼ばれる土湯こけしの成熟、つまり単なる子どものおもちゃとしてのこけしから、描彩、仕上りの美しい観賞に耐えうるこけしへの移行はこのようなして始まった。

土湯系こけしの特色は「簡素、素朴」の美しさといわれている。描彩は頭に墨一色の単純な蛇の目を入れ、それに大ぶりの紅の「カセ」をつけ胴は原則としてろくろ線を主体。弥治郎系や遠刈田系の大きく派手な頭、鳴子系の頭と胴の均整美、量感などと比べると華やかさこそないが、けしひけをとらない味わいがある。

明治初期までの土湯こけ

一人挽きろくろ
自分の足で動かしながら挽くため、綱挽きより自由に使いこなすことができた。技術や作品の進歩に繋がった。

二人挽きろくろ
引き手とろくろの呼吸がぴったり合う事が重要で引き手は妻や弟子たちの役目だった。

しるろくろ線は紅と墨の二色だったといわれている。そのなごりは明治に作られた佐久間浅之助の作品や制作年代は少し後になるが、渡辺作蔵や西山弁之助の晩年の作品にも見られるようだ。浅之助の遺品は赤と青のろくろ線で返しろくろ線の技法も使っている。作蔵の遺品も胴は赤と青だが、あるものは紫なども使い始め、少しずつ現代土湯こけしへの移行を感じさせている。

これら三人の工人の作品は、いわば明治以前と現代土湯こけしをつなぐ橋といえる。しかし、明治三十六年の大洪水による災害の為、こけし全体が少しずつ衰え、こけし工人たちも石工や林業を兼業せざるをえなくなっていた。

土湯こけしの特徴

土湯系は比較的頭が小さく、胴も細めで女性的。頭は黒一色の蛇の目模様と大ぶりな前髪があり、両側の髪に紅のカセ（髪飾り）が大きく描かれている。胴は大綱の間に赤、黄、緑の繊細なるろくろ書きの横縞が入って、クジラ目にたれ鼻、おちよほ口と表情の明るいのが特色。そしてなにより、頭が胴にはめ込み式で、首を回すとキキイと愛らしく鳴くのがかわいい。土湯こけしを最初に作り始めたのは、今から160年ほど前の文政年間の人、佐久間亀五郎と言われている。後に長男の弥七が首の回るこけしを創案したとされている。



- 発生分布
- 発生地 / 福島市土湯温泉町
 - 分布 / 福島・岳・川俣
 - 亜系 / 鯖湖亜系(飯野・日野) 中ノ沢亜系(中ノ沢)

こけしの色
明治初期まで土湯こけしのろくろ線は紅と墨の二色だったといわれているが、最近の研究により、草木を煮だして赤、緑、黄の色材が使われていた可能性があることがわかった。実際、弥七も紅ガラで赤、キワダの皮を煮詰めて黄色を作ったと言われている。

- 形態
- (1) 胴が比較的細く中央部がかすかにふくらむエントランス型
 - (2) 三角胴といわれる裾ひろがりのものもある

自分の心をこけしに表現



TOKUNAGA SHINICHI

徳永 慎一

昭和8年生まれ
福島市土湯温泉町字日向22
☎(024) 595・2338



徳永慎一は、夫婦で農業を営んでいたが、土湯こけしに魅せられ、

徳永慎一は、夫婦で農業を営んでいたが、土湯こけしに魅せられ、

自分で納得のできるこけしが完成しました。これからもお客さまに喜んでいただけるようがんばっていきたいと思います。

…ひとこと…

西山憲一氏に師事したのは、昭和四十八年、四十歳の時。こけしの作風は、西山憲一氏のこけしのやさしい表情を本人型に取り入れて完成させた。目と口のバランスに気を使

だ。こけしを買い求める人がおもわず手に取ってみたいと思われよう。と独自のこけし作りをしている。徳永慎一の工房には、こけしの原木が山と積み、木の選択、乾燥から仕上げま



徳永 慎一



WATANABE TAKASHI

渡邊 隆

昭和28年生まれ
福島市土湯温泉町字杉ノ下24
☎(024) 595・2316



生きた目を描くことが、父師匠への感謝

渡邊隆は、勤めの傍ら家業の土産店を手伝い、さらにこけし工人としても活動している。渡邊

の作るこけしに惹かれるようになり、昭和五十五年に弟子入りし、こけし作りの道に入る。当然の

…ひとこと…

伝統を守りつつ、研究心を持ち、これからも多くの人に愛されるこけしを作っていきます。

結婚当初は、こけし作りにあまり興味はなかったが、義父である等氏

自信を持つて描けるまでに



渡邊 隆

西屋の伝統を守る



NISHIYAMA TOSHIHIKO

西山 敏彦

昭和34年生まれ
福島市土湯温泉町字悪戸尻7の1
☎(024) 595・2401



西山敏彦は、西山弥三郎、浜吉、弁之助、勝次、憲一と続いた西屋直系の工人。父である西山憲

たもの、翌年には福島市内で民芸品店を開業し、平成十八年まで自営業を営んでいた。平成十九

西屋のこけしを伝承するとともに、時代に適応したこけしを作り出すこと。強いては自分もこけしも常に進化し続けることを心がけていきます。

…ひとこと…

と縁が途切れていた。三十五歳で会社を退職後、父憲一氏に師事し弟子入りし

守りつつ、これから先も印象に残る新しいこけしづくりを目指している。



西山 敏彦



WATANABE TETSUO

渡邊 鉄男

昭和12年生まれ
福島市土湯温泉町普ノ沢39の3
☎(024) 595・2056



独学から生まれた土湯こけし

師匠について腕を磨く工人が多い中、渡邊鉄男は、昭和四十八年から独学でこけしを作り続けて

ばきを描き入れるのが特徴で、顔のかわいらしさに加え、全体的にあどけない雰囲気を感じさせる。こ

…ひとこと…

極小の独楽から3mこけしまで、木地技術を活かし、これからもお客さまに愛されるこけしを作り続けていきます。

鉄男のこけしは鮮やかな

本にも掲載された。



渡邊 鉄男

七福神の合わせ物は全国でも制作する人が少なく、昭和五十二年版「日本の木地玩具」という

こけしの微笑みは、わたしの微笑み



ABE KUNITOSHI

昭和47年生まれ
福島市土湯温泉町字下ノ町25
☎(024) 595・2156

阿部 国敏



これからもこけし作りの腕をみがき、伝統を守りながら新しいことにも挑戦し続けていきます。

…ひとこと…

土湯こけし工人の中で一番若い阿部国敏は、土湯こけし隆盛時代の名人と言われた阿部治助氏を曾祖父に持ち、祖父の勝英氏、祖母のシナさん、父の敏道氏と続く土湯こけし工人の名家に生まれました。十九歳でこけし工人の道に入り、木地を陳野原幸紀氏に、描彩を父敏道氏に師事



し、着実に木地挽き、描彩の技術を磨いてきた。福島市に由来もある美人画家の竹久夢二がヨーロッパ旅行の際に鞆に忍ばせていったほど愛した「治助こけし」の型をしつかりと継承し、太い眉と縮れたカセを特徴に美しいこけしを製作している。近年は、「ほほえみがえし」というかわいらしいこけしを発表し、各方面から注目を浴びている。

こけしは乙女心を映し出す



KONNO AKIHIRO

昭和25年生まれ
福島市佐原字田中内38の2
☎(024) 593・3408

近野 明裕



こけしは可愛い女の子。心を込めて描きます。生涯の仕事として続けて行きますのでよろしくお願ひ致します。

…ひとこと…

こけし工人の道に入ったのは、昭和五十五年、二十九歳のとき。佐藤久弥氏の門をたたき弟子入りした。勤めをする傍ら毎週末は師匠の工房に来て、見よう見真似で十年間修行をした。上達するために、自宅にろくろを設置し、時間があ



れば朝夕関わらずこけしを削っていた。近野明裕のこけし作りのこだわりは、理想の女性の顔、夢の恋人だった人の顔を描きながら制作すること。その出来上がったこけしが、玄関の棚にそっと飾られてい

木に対する思い入れが、わたしの土湯こけし



IMAIZUMI GENJI

昭和9年生まれ
福島市土湯温泉町字悪戸尻9の7
☎(024) 595・2321

今泉 源治



土湯こけしの伝統『技あり』というこけしを作り続けられるよう、これからも腕を磨いていきたいと思

…ひとこと…

今泉源治は、二十三歳でこの道に入り、製炭と板金の仕事の傍ら、阿部広史氏や佐藤佐志馬氏の指導を受けて、こけしを作っていた。今泉のこけし作りは、木の気持ちになって良いこけしを作りたいという信念に沿って、材料選びから始まる。自ら山に入り、これと想った木を背負い



山から運び出すなど、材料の選定には強い思い入れがある。この思い入れが、こけしの顔にも表れ、湊屋系である浅之助型、本人型を制作しているがその本人型は、つぶし目のおっとりとした顔からやさしさが滲み出ている。胴体は、黒色を使った土湯こけしの中で、数少ない末広がり

土湯こけしは、土湯温泉の誇り



JINNOHARA YUKINORI

昭和22年生まれ
福島市土湯温泉町字杉ノ下21
☎(024) 595・2329

陳野原幸紀



こけしは全体のバランス。味がなければダメなんです。こけしの顔を見たとときに何かを感じてもらえればうれ

…ひとこと…

味処ひきこの店主でもある陳野原幸紀がこの道に入ったのは昭和四十五年、二十三歳の時。そのきっかけがスキーで骨折したためと。実兄がこけし工人であった陳野原和紀氏で、以前から兄の仕事を眺めながら、こけし作りには興味を持っていたが、骨折の完治に思わぬ時間がかかったため、リハ



ビリの傍らこけし作りの練習を始めたのが、職業としてやっていくきっかけとなった。本人型と久米松型を引き継いでいて、素朴な久米松型はこけしにはめずらしい二重まぶたの目が特徴的だ。土湯こけしを通じて、土湯温泉のまちづくりと観光に積極的に取り組む、福島市の伝統工芸品のひとつとして広く認知される活動をしている。

